

私は友人 C 子さんの最期に思いがけず深く関わりました。信仰について一度もお話することがなかったのに、病床洗礼を希望していると告げてくださいました。それまで彼女の希望に気づかず、鈍感だったと申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。けれども、それゆえに、C 子さんの心に、神様の招きの声が直接に響いたことを知り、深く感動しました。洗礼への橋渡しをし、何度かお見舞いしても、ほとんどお話しすることもできないまま、受洗後二か月で、天に召されました。彼女を思って、もどかしさがぬぐえないまま、心に去来してくるものに圧倒され、様々なことを思いめぐらしました。彼女の最期の姿から、メッセージを受け取りました。心から感謝しています。

難病を抱えながらも、嘆くことはなく、懸命にコントロールしながら日常生活を楽しんでおられる彼女の姿を見てきました。孫娘の電話の声が何とも可愛らしいと言っては喜び、散歩の折に拾った綺麗な赤い実をベランダの鉢で実生させては喜び、お祝いのご馳走がうまく作れたと言っては喜び、そんな C 子さんを私は大好きでした。家族を愛し、小さな命を見守る優しい静かな方でした。

彼女の好きな聖書は詩編23編だと告げられました。「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。」という冒頭の言葉は「深い信頼の中で生きる無上の喜び」を歌っています。C 子さんの願いは神に届き、祈りの中で、神の加護を信頼し、その中で生きることに価値を置かれたのです。

彼女は素晴らしい医療、看護の環境に恵まれ、御夫君の献身的な介護を受けておられました。普通には得難いものです。病人として幸せでした。けれども人としての幸せは健康、富だけではありません。C 子さんは体が衰えていくにつれ、彼女の魂に聖書の言葉が切実に響いてきました。

だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。(コリント II4:16)



C 子さんは以前から、小さいものの中にも、見えない命が様々な変化、輝きを持って生きているさまに目を向けておられたのです。寵子さんの父上は洋画家であり、たくさんの「少女」像を描いておられます。モデルをされたに違いありません。父上の愛に溢れるまなざしの中で、守られ、楽しく生きてこられたでしょう。コレクションの絵は深い愛と信頼を示すものでした。私は「少女」像の絵の中に寵子さんを見つけたのです。目が輝いていて、頤が小さく、あどけないのに、淑やかな、賢い面差しは C 子さん、そのものでした。(絵 :微霜ギャラリー より)

C 子さんは動きが制限されるにつれ、心はますます鋭く、自分のいるべき場所、行くべき道を求めずにはいられなかったのでしょうか。そんな C 子さんの心に神様は温かいまなざしを注がれました。「主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう。」そう、心で決めて、形にしようと洗礼を願われたのだと思いました。見えないものに目を注ぐことに C 子さんは感性が働き、見えないものに対する心を表現したいという前向きな生き方をされたのです。C 子さんはショパンをよく弾かれておられたそうです。洗練された美しい曲に心を解き放って、その想いに寄り添いたい、と願っておられたのでしょうか。今、C 子さんは青草の原、憩いの水のほとりでニッコリしておられることでしょうか。